

## 審査の結果の要旨

氏名 澁谷 知美

近代社会において、男性の身体にはどのような社会的な意味づけが与えられているのか。教育社会学を含め、社会学の分野では、女性の性的身体の社会的意味づけを探る試みは見られるものの、男性を対象にした研究はほとんど行われてこなかった。このようななかで、本論文は、ジェンダー論の視点に立ち、男性の性的身体が近代以降の日本社会においてどのように位置づけられたかを、青少年男子、とりわけ 1890 年から 1940 年代の就学者層に焦点づけて実証的、理論的に明らかにした教育社会学的研究である。

本論文は、6つの章より構成される。序章では、問題設定と方法論の検討が行われる。近代において、男性の性的身体がどのように位置づけられたかという本研究の主題を、教育的視点及び医学的視点から、男子学生の性的身体がいかに関管理されるようになったのかという問題へと展開させつつ、言説分析を用いた歴史社会学的研究としての方法論の検討が行われる。そこでの問題設定に基づき、1章では、木下広次、福沢諭吉、徳富蘇峰らの教育言説を対象に、男子学生の性的身体が、立身出世という価値観との対立関係においてとらえられていたこと、そのために性的身体の使用抑制が説かれていたことが明らかにされる。2章では、こうした言説を受け、「学生風紀問題」への取り締まりという形で、実際に校外での取り締まりが実施されたり、学生自身による自己管理活動が展開したことが、雑誌資料の分析を通じて解明される。

3章では、「花柳病（性病）」をめぐる医学言説を対象に、医学者や教育者による性教育を通じて、性的身体の使用禁止が「科学的」言説によって正当化されていたことが明らかになる。続く4章では、高等学校の入学試験に際し、性病検査として性器を対象とした身体検査（「M 検」と称された）が実施されていたことの実態と、それへの学生の反応についての分析が行われる。その結果、こうした検査の実施やそれをめぐる言説の流布が、学生に自己の身体が性的機能を備えていることを自覚させると同時に、その使用法を誤ると立身出世に響くことを悟らせ、性的身体の自己管理を促したことが解明される。

これらの歴史社会学的分析の結果をもとに、終章では、近代日本社会における男性身体の意味づけについての理論的考察が行われる。そして、男子の身体が、「生産する身体」としての価値付けと、「性的身体」という二重性を帯びて意味づけられていたこと、「性的身体」は「生産する身体」に従属しつつ、それに背反する、アンビバレントな位置づけを与えられていたという結論が導かれる。

以上のように本研究は、これまで十分に研究されてこなかった近代以後の男性の身体性の問題を、性的身体という切り口から、立身出世という価値との関係において、それがいかに管理・統制の対象として位置づけられていったのか、その歴史的背景を解明し、男性の性的身体が馴致されていく過程を解明した点で高いオリジナリティをもつ。その点で、今後の教育研究に重要な貢献をなすものと考えられる。以上により、博士（教育学）の学位論文として十分な水準に達しているものと認められる。